

事業活動実績報告書

施 設 名	東江幼稚園
教 育 理 念	「人と関わる力」「しなやかに動かせるからだ」「自然から学ぶ体験」を育てる

1 事業名	春から冬までの田んぼ活動～①育てる②味わう③利用する～
2 実施期間	令和7年4月1日～令和8年3月31日

3 取組概要	（取組日） 令和7年4月1日 ～ 令和7年 4月 24日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 前年度3月27日に園庭において種まきを実施し、新年度開始後は子どもたちが日常的に水やりに取り組みながら、発芽から生長までの過程を継続して観察した。4月19日には、田んぼカフェにおいて有志の親子及び園長が田植えに向けた準備を行い、4月23日には職員が現地の下見を実施して、5月の田植え活動に備えた確認を進めた。さらに4月24日には、十分に育った苗を子どもたちとともに車へ運搬し、今後の活動への期待を高めながら準備を整えた。 
	（取組日） 令和7年5月6日 ～ 令和7年 5月 9日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 流山市内の田んぼにおいて、全園児と保護者、職員が参加し、3回に分けて田植えを実施した。5月6日は有志家族と全職員、5月8日はそら組・さくら組、5月9日はやま組・いなほ組が取り組んだ。子どもたちは裸足で田んぼに入り、泥の感触を味わいながら、「おいしいお米になりますように」と願いを込めて苗を植えた。あわせて、畦遊びや泥んこ遊びを楽しみ、田んぼ周辺の植物や虫にも親しみ、自然への関心を深める機会となった。 
	（取組日） 令和7年5月24日 ～ 令和7年 7月 5日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 5月24日、5月31日、6月7日、7月5日に、有志の家族による田んぼの除草作業を実施した。活動を通して、田んぼではオタマジャクシやヤゴ、蓮の葉に触れ、畦ではテントウムシやシロツメクサ、スズメ、ツバメなど多様な生き物や植物に親しむ機会となった。園庭とは異なる自然環境の中で観察やふれあいを重ね、身近な生き物への関心を深めることができた。なお、職員も交代で除草作業を行い、稲の生長を見守りながら管理にあたった。 
	（取組日） 令和7年9月3日 ～ 令和7年9月 8日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 9月3日にさくら組・いなほ組、9月6日に有志家族と全職員、9月8日にやま組・そら組が稲刈りを実施した。年少児も親子でのこぎり鎌を使い、伸びた稲を自ら刈り取って運ぶ体験に取り組んだ。畦に稲束が積み上がっていく様子を見ながら、収穫の喜びと作業の大変さを実感する機会となった。また、稲刈りに伴って見られたイナゴについても関心を深め、9月9日には保護者の協力により調理の様子を見学し、食文化に触れる体験へとつなげた。 

3	取組概要	(取組日) 令和7年9月3日 ～ 令和7年9月19日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 稲刈り後に園庭に稲束を干し、9月19日に脱穀を実施した。園庭では、農機具を用いて脱穀の様子を子どもたちが身近に見られるよう工夫し、関心を持った子どもは作業の一部を手伝う機会も設けた。あわせて、割り箸で穂先をしごく脱穀や、すり鉢を使った粃摺りも体験し、米が食卓に届くまでには多くの手間がかかることを学んだ。こうした活動を通して、昔の暮らしや農作業の苦労への理解を深めることができた。	
		(取組日) 令和7年9月26日 ～ 令和7年12月19日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 9月26日には、保護者の協力を得て、園で収穫した新米を園庭の釜で炊き、全園児で収穫の恵みを感謝しながら味わうおにぎり会を実施した。玄米おにぎりをよく噛んで食べる中で、米本来の甘みを感じるとともに、種まきから収穫、調理を経て口にするまでには多くの手間と時間を要することを学んだ。その後も年度末まで、各クラスで薪釜による炊飯やおにぎり作り、カレーライス作りを継続し、食や自然への理解を深める取組とした。	
		(取組日) 令和7年 12月 6日 ～ 令和 年 月 日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 収穫した米を用いて、全園児による餅つき活動を実施した。園庭に大きなせいろを設置し、蒸した米が餅へと変化していく過程を子どもたちが見学するとともに、実際に餅つきも体験した。つき上がった餅は、担任が鏡餅に整える様子を見守りながら、飾り餅として各教室に飾るまでの流れを共有した。多くの保護者ボランティアの協力も得られ、子どもと保護者がともに収穫の喜びを味わい、日本の伝統的な食文化に親しむ機会となった。	
		(取組日) 令和 7年 12月 15日 ～ 令和 年 月 日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 脱穀後に残った藁を活用し、しめ飾り作りを行った。保育時間中には、園庭で保護者や職員が藁を編んで縄にしている様子を子どもたちが見学し、興味を持った子どもは実際に体験する機会も設けた。作業は容易ではないものの、自ら進んで挑戦する姿が見られ、藁が生活に生かされる素材であることを学ぶ機会となった。できあがった縄は干し柿作り等にも活用し、担任が作成したしめ飾りは、各クラスの正月準備の一つとして用いた。	
		(取組日) 令和7年 9月13日 ～ 令和8年2月24日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 年度当初から進めてきた田んぼカフェと田んぼの管理は、稲刈り後も継続して実施した。有志の園児家族や職員が、藁切り、草刈り、落ち葉掃き、畦塗り、代掻き等を行い、次年度の田植えに向けて田んぼを整備した。米づくりが一年を通じた営みであることを共有する機会ともなった。 また、桃、枇杷、フキノトウ、ヨモギなど田んぼの果樹野草を収穫して味わった。	

効果検証報告書（継続事業用）

施設名	東江幼稚園				
教育理念	「人と関わる力」「しなやかに動かせるからだ」「自然から学ぶ体験」を育てる				

事業の区分(5領域)	幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)				
	健康	人間関係	環境	◎	言葉
1 事業名	春から冬までの田んぼ活動～①育てる②味わう③利用する～				
2 事業概要	年間を通しての稲作活動。①「育てる」種まき、育苗で、草取り、田植えから稲刈りをして、脱穀、などの育てる活動②「味わう」収穫した米を食べる 活動(おにぎり、お餅、米粉団子)③「利用する」収穫後の藁を使ったしめ縄作りを通して日本文化を体験する。				
3 対象学級(クラス名) 対象人数	全園児 (クラス名: やま組・そら組・いなほ組・さくら組)				114 名
計画時	4 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況 流山市に300坪の田んぼを借りている。 理事長、園長および事務兼用務職員が農業経験があり指導できる。			
	事業後 4についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 農業体験があって・指導できる職員に加え、農業経験のある卒園児保護者が定期的にかかわり、様々な農作業で支えてくれた。R7年度は、R6年度同様の田んぼ活動に加え、田んぼで採れる野草の調理や、農作業の合間に焼き芋を焼いて食べる等、食に関する活動が増え、園児が自然や作物をより身近に感じる機会となった。栽培や収穫だけでなく、調理して食べるまでを体験することで、食への関心や自然への興味をより深めることができた。引き続き、教育的観点(田んぼの泥んこ遊び・自由な畦遊び・園児が植えやすい稲の間隔の確保・効率や収穫量より園児の安全と体験重視の作業、等)を優先しながら、田んぼを広々使い、豊かな体験活動を行える環境であった。			
計画時	5 事業のねらい	日本人の主食であるお米の栽培を通して、自然の営みに関心を持つ。 土や植物に触れて自然の循環や生態系、様々な昆虫などについても知ることができて学びにつながる。 また、しめ飾りや餅つきなどお米や藁を使った日本人の文化に関わり関心を持つようになる。			
	事業後 5についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 田んぼ活動を通して、園児は田んぼに生息する多様な動植物に触れることができた。イナゴの佃煮づくり、枇杷の葉を用いたお茶づくり、落ち葉やもみ殻の燻炭づくりに伴う焼き芋、フキノトウやヨモギの採取と喫食等、自然の恵みを生かした多様な食の体験を行うことができた。加えて、園児だけでなく保護者にも、田植えや稲刈りに加え年間を通して田んぼ活動に参加してもらうことで、親子で稲作や農作業への関心を深める機会となった。			
計画時	6 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 流山市で田んぼを借り、完全無農薬・無化学肥料で稲作を行う。稲の栽培を通じて多様な生き物と出会い、種蒔から収穫までの過程を学ぶ。収穫後はお米を食べ、餅をつき、しめ飾りを作る。年間の活動- 3月: 園庭で種まき、田んぼの代掻き、- 4月: 園庭で育苗、5月: 田植え、6～8月: 草取り(希望者家族も参加)、9月: 稲刈り、10月: 脱穀、収穫祭、11月: 米粉を使った菓子作り、12月: しめ縄作り、1月: 鏡開き、10～2月: 田んぼの耕運・田起こし(希望者家族が参加) 園児が全員で関わるのは、種まき・育苗・田植え・稲刈り。特に田植えと稲刈りは、大型バスで田んぼへ移動し、実際に作業を体験する。それ以外の期間は、田んぼに設置したライブカメラで稲の成長を観察。さらに、土日に親子で田んぼに行ける「田んぼカフェの日」を年11回設定し、自然と触れ合う経験をさせる。			
		上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点			
		環境との関わり- 自然との触れ合い: 無農薬・無化学肥料の稲作を通じて、稲の栽培だけでなく、様々な生き物と出会い、生命の尊さを学ぶ。 季節の移り変わりの理解: 種まきから収穫までの過程を体験し、自然の変化を実感する。			
		(継続事業のみ記入) 前年度の取組から発展させた点 今年度は、新しい取り組みとして親子の連携活動として、現地田んぼで調理活動をおこなう。田んぼでとれるお米、ヨモギ、その他果実などを使った「親子料理教室」を田んぼで実施。土曜日など、親子で一緒に参加できる機会を作る。子どもたちも、目の前で食材を収穫して食べたり、「食」への意識経験を高める。			

事業後	6についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 7年度は、R6年度同様の田んぼ活動に加え、田んぼで採れる野草の調理や、農作業の合間に焼き芋を焼いて食べる等、食に関する活動の充実を図ったことにより、園児が自然や作物をより身近に感じる機会となった。栽培や収穫に加え、調理及び喫食までを含めた一連の体験を行うことで、食への関心や自然への興味をより深める効果があった。
	7 環境構成例	幼稚園で種まき、育苗を行う。 流山市の田んぼで田植え、稲刈りをはじめとする稲作活動をする。同時に昆虫採集をすることができる。 園からもライブカメラで稲の様子を確認できる。 収穫後はお米を使った食育活動を園で行う(餅つき、鏡餅作り、しめ縄作り)
計画時	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 幼稚園内にも「バケツ田んぼ」をつくり、育てることで身近で稲の成長に触れることもできた。年間を通じ、田んぼと米に関わる活動が園内にあり、常に関心を向ける環境であった。昨年度増やした羽金や竈を使い、調理(炊飯)体験をさらに増やしたことで、お米がより身近な素材となった。
	8 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 米づくり体験は、普段から私たちの食卓に欠かせない「米」について深く理解する貴重な機会である。この体験を通じて、種まきから育てるまでのプロセスを学ぶことで、自然の循環や農業の重要性についての洞察が得られる。さらに、日本の食文化や食の大切さについても深く学ぶことができる。 また、この体験は日本文化に触れる良い機会でもある。日本の伝統的な農耕文化や食の大切さについて深く理解することができる。
	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 事業実施後の効果として、子どもたちは田植えや稲刈りなどの田んぼでの作業に加え、ご飯を炊く、おにぎりを握る、しめ飾りを作るといった活動を年間を通して継続的に経験することで、米が日々の生活と深く結びついていることを実感できた。単発の体験にとどまらず、自然や季節の変化に繰り返し触れる機会となったことで、自然への関心や親しみが高まり、食や農への理解も深まった。日本の農耕文化や食文化への理解を育むうえでも、有意義な取組であった。
9 効果検証総括		事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 本事業を通して、子どもたちは種まきから育苗、田植え、稲刈り、調理、しめ縄作りに至るまで、米に関わる一連の活動を継続的に経験し、米が日々の生活や日本の文化と深く結びついていることを実感する姿が見られた。無農薬・無化学肥料の田んぼで多様な生き物や自然の変化に触れたことは、自然への関心や生命への親しみ、食や農への理解を深めることにもつながった。また、親子で参加できる活動を取り入れたことで、家庭と園が連携しながら学びを広げる基盤づくりにもなった。今後も食育活動とも結び付けることでより日常的で深まりのある教育・保育へと発展させていくことが重要である。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。